

『麗情集』 「長恨歌伝」と『文集』 「長恨歌伝」

附：澤崎久和評

下定 雅弘

はじめに

「長恨歌」（以下「歌」と略称）の主題を考えるにあたっては、「長恨歌伝」との比較及び両者の関係を探ることが必須の作業である。その際、「長恨歌伝」は、『文集』巻十二で「長恨歌伝」を前に置き、その後に「歌」を配置した白居易自身の編集意図を尊重し、『文集』所収の「長恨歌伝」（以下「伝」と略称）を対象とするべきである。私は、この作業を、「「長恨歌伝」をどう読むか？—楊貴妃像の検討を中心に—」（「岡山大学文学部紀要」52、2009.12。以下、「前稿」と略称）で行った。

「前稿」の結論を簡単に述べておく。「歌」が玄宗の貴妃への愛の深さと貴妃を失った痛恨を詠うことで、愛の無限の力への感嘆を示すのに対して、「伝」は、天子を誘惑する「尤物（絶世の美女）」貴妃をとがめ、これに溺れてしまった天子たる玄宗を戒めて、世の乱れを防ぐ目的で書かれたものである。したがって、「伝」は各処で貴妃に対して冷たく批判的な筆致で、その悪女性を強調している。

この「前稿」の執筆過程において、『文苑英華』巻七九四「長恨歌伝」の後に、「此の篇は又た麗情集（1）及び京本大曲にも見ゆ。頗る異同有り、並びに後に録す」との前書きがあつて付されている「長恨歌伝」（以下、「麗」と略称）との比較が、「伝」の記述のねらいや表現の特徴を明らかにする上で極めて有効であることに気づいた。

『太平広記』巻四八六にも「長恨伝」（2）が載るが、これは本文は「伝」とほぼ同じでありながら、成立事情を記す末尾の識語の箇所には大きな異同が

ある。「麗」は、全体にわたって、各処に主題そのものに関わる相違があるのである。拙文では、「麗」と「伝」の比較に力を注ぎ、『太平広記』所収「長恨伝」の検討は後日の課題とする。

「伝」と「麗」との比較の作業は、日本ではすでに、竹村則行『楊貴妃文学史研究』（研文出版、2003.10）Ⅰ・一・三「長恨歌」と「長恨歌伝」（初出は1995。以下「竹村」と略称）及び澤崎久和「麗情集」所収「長恨歌伝」について」（「東洋古典学研究」5、1998.5。以下「澤崎」と略称）が、これを行っている。

「竹村」については、拙文「長恨歌」の現在—「李夫人」との異同に着目しつつ—（「岡山大学文学部紀要」47、2007.7。以下「前前稿」という）ですでに言及したが、今「麗」（「竹村」ではB本）と「伝」（「竹村」ではA本）とに対する「竹村」の見解の結論のみを記しておく。（イ）「麗」は、「伝」に比べて四字句を頻用し文意が生硬。「伝」は「麗」を基本にして推敲したものだ。（ロ）引用された諺語・箴語を見るに、「麗」ではくどいと思われる表現を「伝」は簡明にしている。（ハ）識語の問題。「伝」の方が「麗」に比べて、場面が具体的であり、物語風で分かりやすく潤色されている。

「竹村」の指摘はその可能性もあるが、そうだと断定しうるほど強力な証拠があるものではない。（イ）（ロ）（ハ）のいずれもが、「伝」を先とする立場との間で水かけ論に終わる性質のものだと思う。

「澤崎」の大要を記しておく。（一）「伝」（「澤崎」では甲）と『太平広記』巻四八六所収の伝とは末尾の識語に大きな相違がある以外、本文自体にはさほどの異同はない。これに対して「伝」ないし『太平広記』所収の「長恨伝」と「麗」（「澤崎」では乙）との間の異同は大きい。（二）「麗」は時代設定において漢と唐とを混在させており、「歌」の漢と「伝」の唐との中間に位置する。（三）「麗」は「伝」に比べて、楊貴妃と玄宗との愛情の悲劇を強調する内容になっている。（四）「麗」は、四字句と対句を多用し、時に平仄・押韻の配慮を見せる。「麗」の文体は、「伝」に比べれば事柄の叙述よりも情景や事態の描写に傾く。「麗」は韻文的で描写性の高い表現を随所に取りこんで、「歌」のもつ抒情性に近づいている。（五）「歌」と「伝」との間には一致する表現はまれだが、「歌」と「麗」との間には明らかな継承

関係が見られる。「麗」は「伝」より後出で、「伝」と「歌」とに拠って成ったものとする。「麗」が成立したのは、宋に入って以後、張君房が『麗情集』を編纂するまでの間だろう。

中国では、周相録『《長恨歌》研究』（巴蜀書社、2003.10。以下、『周』と簡称する）が、第二章「《長恨伝》版本校訂」（34～66頁）において比較作業を行っている。『周』は主として、①「麗」が「歌」の主旨に近い、②「麗」が史実との齟齬が少ない、の二つの理由によって、「麗」が陳鴻の原作に近く、「伝」（『文集』及び『文苑英華』所収の作）と『太平広記』所収のものが後出だと結論している。（3）『周』の個々の見解には参考すべき点が少ないが、私とは「歌」と「伝」の関係についての基本的な見方が異なる。

「竹村」「澤崎」『周』の具体的な指摘については、以下、必要に応じて言及する。

拙文は、もっぱら、「麗」の文の展開に即し、主題の問題に密着して論を進める。ここから自ずから、「伝」と「麗」の先後問題についても、一定の見方を提示することができる。

「伝」と「麗」—各段落の比較—*

*以下、澤崎久和「『文苑英華』所収『麗情集』「長恨歌伝」の本文について」（『白居易研究年報』11、2010.12）が、拙文の『麗情集』「長恨歌伝」の文字について記す高見を附載する。指摘は私の分段[1][4][6][7][10][11]の文字、計7箇所についてなされている。異論のある箇所は「麗情集本」原文に下線を施し【澤崎】として示す。

「伝」と「麗」との比較を各段落について行おう。

「伝」（4）と「麗」の双方の原文を段落ごとに挙げ、「麗」の訓読と訳を示して比較を行う。作業の便のため、段落冒頭に算用数字を付して第何段落かを示す。

「麗」の原文中[]で示すのは、原文では意味が通じないので、音や字形の類似による誤りとみなし、その文字が適切であろうとの判断を示す（「澤崎」をも参照した）。

語注は本文注の後に記す。注を付ける語には、原文中に*を付した。拙文の論の展開に必要な範囲に留めている。

[0]

[麗]此篇又見麗情集及京本大曲。頗有異同、並錄于後。

この一文は「伝」にはない。「伝」と「麗」の段落番号を一致させるために0段落とする。

[1]

[伝]開元中、泰階平、四海無事。玄宗在位歳久、勩於盱食宵衣。政無小大、始委於右丞相。稍深居遊宴、以聲色自娛。先是元獻皇后、武淑妃皆有寵、相次即世。宮中雖良家子千萬數、無可悅目者。上心忽忽不樂。

[麗]開元中、六符炳靈*、四海無波。禮樂同、人神和。天子在位歳久、倦於盱食*。始委國政於右丞相*。端拱*深居、儲思*國色。先是元獻皇后*、武惠妃*皆有寵、相次夢謝。宮侍無可意者。上心忽忽[忽忽]焉*不自樂。

[訓]開元中、六符^{いれい}炳^い靈^し、四海波無し。礼樂^{ひと}同^としく、人神和す。天子在位すること^{とし}歳^く久しくして、盱^{かん}食^{しよ}に倦む。始めて国政を右丞相に^{ゆだ}ぬ。端拱深居して、国色を^{ちよ}儲^し思^す。是れに先んじて^{げんけん}元^{けん}獻^{くわん}皇后、武^{はい}惠^い妃^ひ皆な寵有り、相い次いで^{ぼうしや}夢^う謝^す。宮に^は待^べるに^{おも}う可^うき者無し。上が心は^{こつこつえん}忽^{えん}忽^{えん}焉^として^{おの}ず^から^ら樂^しま^ず。

[訳]開元年間、天空にかかる泰階六星は靈の力を輝かしており、四海には波もなく平穩無事だった。礼と樂とは等しく力を發揮し、人と神も和やかな関係にある（すなわち全世界が平和だった）。天子は長いあいだその位に在って、遅く食事をとるなどして日夜政務に励むことに飽きてしまい、国政を右丞相に任せ、宮中の奥に引きこもって、ひたすらに国一番の美女を得たいものと思うようになった。これより前、^{げんけん}元^{けん}獻^{くわん}皇后や^ぶ武^ぶ惠^い妃が寵愛を受けていたのだが、相次いではかなく世を去っていた。宮中に侍る者には気に入る女が誰もいない。陛下は失意に陥り鬱々たる日々を過ごされていた。

【澤崎】「夢[薨]謝」一傳校(傳增湘撰『文苑英華』校記)・明鈔本麗情集「伝」ともに「薨」にあるのに従う。汪本(汪辟疆『唐人小説』)・周本(周相録『《長恨歌》研究』)はすでに「薨謝」に改め張本(張中宇『白居易《長恨歌》研究』)及び下定論文(本稿)は「夢謝」のままとする。下定氏の訳文は、「はかなく世を去っていた」(七六頁)。しかし、「夢謝」の用例は

容易には見出しがたい。これに対して身分ある者の死去を意味する「薨謝」は、『陳書』卷三五、陳宝应伝に、「征南薨謝、上策無忌、周南餘恨、嗣子弗忝」とあり、『旧唐書』卷一七六、崔龜從伝に、「龜從又以大臣薨謝、不於聞哀日輟朝」とあるなど、散見する。皇妃の死には、「薨謝」がふさわしい。

両者、文の内容に大きな異同はない。いずれも、天下太平に飽きた天子が女色にふけることを述べ、心にかなう女がいないために、鬱々たる日々を過ごすことを述べる。ただし、「麗」は、「天子在位歳久、倦於盱食」と述べて、ここに玄宗の語がない。「伝」が玄宗の名を明記するのとはちがう。これは、「伝」が史実を利用しつつ(史実に忠実なのではない、「前稿」を見よ)、玄宗を咎め、「尤物」批判を展開しようとする姿勢の表れである。これに対して、「麗」では、以下にも見るように、天子への批判は極めて弱い。

なお、『周』は「伝」に「武淑妃」とあることについて、新旧両唐書に、「武惠妃」と明記する例等を挙げて(語注「武惠妃」を見よ)、「淑妃」とするのは唐代の典制制度を知らない人間が誤って書きかえたものだし(『周』48.49頁)、これをもって「麗」が陳鴻原作に近く、「伝」が後出だと見る根拠の一つとする。だが、『周』が述べるように、后妃の制度は、開元中、「四妃(貴妃・淑妃・徳妃・賢妃)」の制から「三妃(惠妃・麗妃・華妃)」の制に変わり、それが天宝四年以前にまた、「貴妃」を加えて「四妃」にもどす(5)というようにめまぐるしく動いているのであり、陳鴻が思い違いをし、白居易もこれに気づかなかった可能性もある。逆に、『文集』所載の「伝」が後出で、陳鴻原作に近い「麗」を書きかえたものだとするなら(後述するように、それは元和元年[806]冬から長慶四年[824]の『長慶集』成立までの間の、白居易と陳鴻を含む友人たちの間でのできごとであるはず)、(白居易・陳鴻らは)「麗」が正しく「惠妃」としているものを、なぜわざわざ「淑妃」に誤つのか? その方が不自然ではないだろうか。私は、「麗」が「伝」の誤りに気づき、これを正したものと見る。

[2]

[伝]時每歳十月、駕幸花清宮。内外命婦、焜耀景從。浴日餘波、賜以湯沐。春風靈液、澹蕩其間。上心油然、恍若有遇。顧左右前後、粉色如土。詔高力士潛搜外宮、得弘農楊玄琰女於壽邸。

[麗]時歳十月、駕幸驪山之華清宮、浴于温泉。内外命婦*、熠燿*景從。浴日[日]餘波、賜以湯浴。靈液不凍、玉樹早芳、春色澹蕩、思生其間。上心油然、恍若有遇。顧宮女三千、粉光如土。使搜諸外宮、得弘農楊氏女。

[訓]時に歳十月、驪山の華清宮に駕幸し、温泉に浴す。内外の命婦、熠燿ゆうようとして景かげのごとく従う。浴日の余波、賜うに湯浴を以てす。靈液凍らず、玉樹はと早く芳しく、春色澹蕩、思い其の間に生ず。上が心は油然たり、恍こうと

して邁^あう有るが若^づとし。宮女三千を顧みるに、粉光土の如し。諸れを外宮に
捜^{さが}がさしむるに、弘農楊氏の女^{むすめ}を得たり。

[訳]時に十月、陛下は驪山の華清宮に行幸され、温泉で湯浴みされた。こ
れには内外の命^{めい}婦^ふがきらびやかに装い影のようにつきしたがっており、天
子が湯浴みした後にはその残り湯で沐浴することが許された。靈妙なお湯は
凍ることはなく、玉のように美しい樹には芳しい香りが立ちのぼり、あたり
には春の風情がたゆたうて心ときめき、天子はうっとりとして、何かに出会
ったような気がされた。だが宮女三千人を見ても、おしろいを塗ったどの顔
も土のようにくすんでいる。そこで宮廷外の御殿を方々探させたところ、弘
農の楊氏の女^{むすめ}を見つけた。

これも話の展開はほぼ同じである。ただし、「上心油然」、誰かはわから
ないがこれはという女がいるような思いがするその前、「伝」は「春風靈液、
澹蕩其間」と二句で片づけるが、「麗」は「靈液不凍、玉樹早芳、春色澹蕩、
思生其間」と、春爛漫、愛が生まれて自然な雰囲気をたっぷりと描いている。

貴妃を探し当てる最後の一文、「伝」は「詔高力士潛搜外宮、得弘農楊玄
琰女於壽邸」であり、「麗」は「使搜諸外宮、得弘農楊氏女」である。これ
は二つの点で大きく異なる。「麗」には、「高力士」の名がなく、また寿王
の邸宅に見出したことを明記しない。「麗」は、「伝」に比べて、現実の玄
宗と貴妃の情愛譚であることを離れ、仮構性を強めている。これは実際の二
人の情愛については批判が強いので、それを避けて、より強く情愛そのもの
に注目させようとするねらいによるだろう。単に「弘農楊氏女」とするのは、
「歌」3句が「楊家有女初長成」とするの近く、「楊氏女」の処女性をにお
わせる。また、「伝」のように寿王の邸宅に見出したことを明記すれば、わ
が子の妃さえ自分のものにしようとするす玄宗の好色性が強く出る。これに
対し、「麗」は天子の好色を咎める度合いを、「伝」に比べれば弱めている。

なお「麗」に見える「三千」の数も、「歌」19.20句に「漢宮華麗三千人、
三千寵愛在一身」と見える（「澤崎」が、すでに「歌」と同じ、または類似の
語を調査している）。

「麗」は、その始まりからしですでに、「歌」の主旨にかなり近いことを

示している。

なおここで、『周』の両つの「長恨歌伝」を比較する態度を確認し、私の立場を明らかにしておこう。

『周』はこの一段についていう、「「文」本（「伝」を指す……下定。以下、同じ）「長恨歌伝」は云う、“顧左右前後、粉色如土”と、そして「麗」本「長恨伝」は“顧宮女三千、粉光如土”とする。これを「長恨歌」の“六宮粉黛無顔色”、“後宮佳麗三千人、三千寵愛在一身”と比べると、あきらかに後者（「麗」）はさらに「長恨歌」の本来の意に近づいている。ここで強調しておかねばならない。「長恨伝」（『周』は「長恨伝」が原名だとする、46頁）は本来は白居易が「長恨歌」に「伝」することを依頼してできたものであり、多くの学者もそれを「長恨歌」を散文化して記述したものだと見ている。この点をはっきりしている以上、我々は、陳鴻の原作は当然「長恨歌」に近いはずだと考えてよいのであり、改めてこの問題を考えなおす必要はない、ましてや（陳鴻の原作が）「長恨歌」の意に背くことなどあってはならないのである。私の考察によれば「文」本「長恨歌伝」は多くの箇所では「長恨歌」と基本思想及び表現手法において原則が一致しておらず、はなはだしくは「南轅北轍」といっていいほどに方向が正反対である。たとえば、上に引いた一段の中に、「得弘農楊玄琰女於壽邸」の一文があるが、「麗」本「長恨伝」には、ただ「得弘農楊氏女」というだけで、全く楊貴妃の真実の身分である「楊玄琰」と「壽邸」の六字を出していない。「長恨歌」には云う、「楊家有女初長成、養在深閨人未識」と。……白氏は李・楊の愛情を比較的純粹で、真摯な基礎の上に打ち立てようとしたのであり、……もしも李隆基の寵妃が彼の息子寿王李瑁の妻であることを明らかにすれば、いかなる彼らの愛情の真摯と清潔への夢も粉碎されてしまい、作品中で彼らの尽きることのない愛とその堅固さを歌うことができなくなってしまう。もしも、陳鴻が意識的に白氏にそむいて読者に史実を示したのだとすれば、ただ彼自身が強調した「予所據、王質夫說之爾」（「麗」の識語の末尾）一決して史実ではない—というのに違反するばかりではなく、「但傳《長恨歌》」（「伝」の識語末尾）というのとも一致しないことになる。……」（50.51頁）。

私の立場は、拙文のはじめに記した。①「歌」と「伝」とはその主旨がち

がう。「歌」は愛の無限の力への感嘆を詠じたものであり、「伝」は天子を誘惑する「尤物」をとがめ、天子たる者が「尤物」に溺れてはならないとの訓戒を述べた作である。②「伝」が「歌」の本意とは異なることを述べているのは、陳鴻の原作がそうだったであろうし、また作品が広範な読者を獲得するための白居易自身の戦略だった。当時の規範的常識といえる玄宗の貴妃への情愛への批判的な見方を示す解説即ち「伝」を「歌」の前に置くことによって、白居易は広範な読者(特に知識人)の普通の見方を吸収して、これを一種のクッションとし、その上で、「歌」の世界につきあってくれるようにと考えたのである(詳しくは前前稿を見よ)。

したがって、『周』の指摘すること―「伝」は「歌」に背反することがしばしばある―というのは、個別に、現象としては同意するが、それをもって、「伝」が陳鴻の原作ではない、あるいは近いものではない、ということには、全くならないのである。

なお、「伝」も「麗」も識語の末尾で、史実に即しているわけではないことを強調する。それは、「伝」は史実を利用し改変して、「尤物を懲らし、乱階を^{ふさ}ぎぐ」目的を果たしているのであり、「麗」は、できるだけ史実には触れずに、天子たるものが「尤物」の魅力(=魔力)の虜となってしまうことへの感嘆を表現しているからである。史実との距離は、「伝」と「麗」の先後を決める材料にはならない。

[3]

[伝]既筭矣。鬢髮膩理、織穠中度、舉止閑冶、如漢武帝李夫人。別疏湯泉、詔賜澡瑩、既出水、體弱力微、若不任羅綺、光彩煥發。轉動照人。上甚悅、進見之日、奏霓裳羽衣以導之。定情之夕、授金釵鈿合以固之。又命戴步搖、垂金璫。明年冊為貴妃、半后服用。繇是冶其容、敏其詞、婉變萬態、以中上意、上益嬖焉。

[麗]既筭矣。綠雲生鬢、白雪凝膚。渥寥[飾]光華。織穠[穠]有度*、舉上[止]閑冶、如漢武帝李夫人。上見之、明日詔浴華清池。清瀾三尺、中洗明玉。蓮開水上、鸞舞鑑中。既出水、嬌多力微、不勝羅綺。春正月、上心始悅。自是天子不早朝、后夫人*不得侍寢。

[訓]既に筭^{こう}が^{がい}せり。綠雲鬢に生じ、白雪^{はだ}膚に凝る。渥飾光り華や

ぎ、織穠 度有り。舉止 閑^{かん} 浴^やにして、漢武帝李夫人の如し。上之れを見、
み^{よう}に^ち目^め 詔^{めい}して華清池に^ゆ浴^あみ^せしむ。清き^な瀾^み 三尺、中に明玉を洗うが
ごとし。蓮は水上に開き、鸞は鑑の中に舞う。既に水を出ずれば、嬌多く力
微くして、羅綺にさえ勝えず。春正月、上が心は始めて悦ぶ。是れ^よ自^り天子
は早朝せず、后夫人（6）^い寝^ぬるに^は待^べるを得ず。

[訳]彼女は髪に笄^{こうがい}を挿してすでに適齡期に達していた。頭の左右両
側には豊かな黒髪がもりあがり、肌は白雪が凝るようになめらかで、美し
い飾りが光りかがやき、体つきはかよわすぎず豊満すぎず、ものごしはしと
やかでなまめかしく、まるで漢武帝の李夫人のようであった。天子は彼女を
見ると、翌日には^み詔^{めい}の^りして彼女に華清池の湯浴みを賜った。貴妃が入
ったお湯のあたりには清い波が三尺の幅ほどにおこり、まるで輝く玉を洗っ
ているかのようであり、蓮が水上に花開き、鸞が鏡の中で舞っているよう
もあった。温泉を出ると、その体はなよなよして力は弱く、うすぎぬをま
と^うので^さえた^えかねる^ような^ふ風^{ぜい}情^いである。春正月、天子はようやくお喜び
になった。これより以後、朝早く宮廷に出て政を行うことはなくなり、後宮
の夫人たちは天子の寝所に侍ることがなくなった。

「渥寥光華」の「渥寥」、「澤崎」は「渥飾」のことかとする。ひとまず、
これに従う。「麗」は、「伝」よりも貴妃の美しさを描く点で工夫している。
貴妃が李夫人のように美しく、あでやかであるのを描く所、「伝」が「鬢髮膩
理、織穠中度、舉止閑冶」というのに対し、「麗」は「緑雲生鬢、白雪凝膚。
渥飾光華、織穠有度、舉止閑冶」である。艶やかな黒髪と、雪のように白い肌、
美しく輝く装身具。「伝」の描写よりも丁寧で色彩もあざやかである。

貴妃の湯浴みの時の美しさ、その描写は「伝」にはなく、「麗」には「清
瀾三尺、中洗明玉。蓮開水上、鸞舞鑑中」とある。貴妃の美貌のゆえに、あ
たり全体がきらびやかな夢のような情景になっている。なお「麗」が貴妃の
肌の美しさを「雪」の白さに譬えるのは、「歌」88 句に「雪の^は膚^だえ花の
か^んば^せ 参^{しん} 差^しとして^こ是^れなり」というのと共通している。「伝」に貴妃の
肌を雪の白さに譬える表現はない。

貴妃が湯浴みから上がる場面、「伝」が「體弱力微、若不任羅綺。光彩煥

發。轉動照人」であるのに対して、「麗」は「嬌多力微、不勝羅綺」と短い。「伝」が「光彩煥發。轉動照人」というのは、貴妃が発散する魅力(=魔力)を十分に伝えている。この記述は、後の「婉變萬態、以中上意」の伏線ともいえ、貴妃の主体的・能動的なはたらきかけを強調する意味を持っているだろう。逆に「麗」の簡潔な記述は、貴妃の愛らしさ・しとやかさを感じさせる。

「伝」の「上甚悦、進見之日、奏霓裳羽衣以導之。定情之夕、授金釵鈿合以固之。又命戴步搖、垂金璫、明年冊為貴妃、半后服用」が「麗」にはない。これに続く「伝」の「由是冶其容、敏其詞、婉變萬態、以中上意、上益嬖焉」は、「麗」では、やや語を変えて次の段落に配置されている。霓裳羽衣の曲を舞わせ、情を交わした夜、金釵・鈿合を与えたこと、見出した翌年には早くも貴妃に昇進させたこと。貴妃が媚態を千變万化させて、天子の心を虜にってしまったこと、いずれも「麗」にはない。「麗」は、「自是天子不早朝、后夫人不得侍寢」(「自是……」は、「歌」16句「從此君王不早朝」をほとんどそのまま襲う)と、あっさりした記述である。「伝」のほうがより多く、玄宗の貴妃への惑溺を強調し、また貴妃が主体的・能動的に玄宗をたぶらかした「尤物」であることを明確に示す表現になっている。

この一段、全体として、「麗」では、天子の好色と貴妃の「尤物」性(その魔力)が、「伝」に比較すれば弱く、貴妃の美貌と愛らしさが前面に出ている。

なお、『周』は、「伝」の「明年冊為貴妃、半后服用」が史実ではないことをもって、唐代の典制に明らかな人ならこんなまちがいを犯すはずはないとする(49.50頁)。だが、「伝」は、「伝」の主題にあわせ、それを強調するために、史実を利用し改変していること前稿で述べた(91頁。前稿注(5)をも見よ)。この部分について再度確認すれば、史実は玄宗が楊氏の女^{むすめ}を華清宮に召したのは開元二十八年(740)十月であり、貴妃としたのは天保四年(745)、五年後のことである。このように改変したのは、「伝」は、玄宗のはやる思いを強調しようとしたのである。反対に、「麗」は史実から遠ざかり、仮構の愛情譚となるように工夫している。したがって、史実との矛盾はわずかしかないのである。

[伝]時省風九州、泥金五岳、驪山雪夜、上陽春朝、與上行同輦、止同室。宴專席、寢專房。雖有三夫人・九嬪・二十七世婦・八十一御妻暨後宮才人・樂府妓女、使天子無顧盼意。自是六宮無復進幸者。非徒殊豔尤態、獨能致是、蓋才智明慧、善巧洪佞、先意希旨、有不可形容者。

[麗]時省風九州、泥金五嶽*、驪山雪夜、上陽春朝、行同輦、止同宴。妖其容、巧其詞、歌舞談笑、婉嬖便佞*、以中上心。故以為上宮*春色、四時在目。天寶中、後宮良家女萬數、使天子無顧盼意。

[訓]時に風を九州に省^{さい}し、金を五岳に泥^{でい}し、驪^{りざん}山の雪夜、上^{じょう}陽^{よう}の春朝、行けば輦を同じくし、止まれば宴を同にす。其の容を妖^あで^でやかにし、其の詞^{ことば}を巧みにし、歌舞談笑し、婉^{えん}嬖^{れん}便^{べん}佞^{ねい}、以て上^{しょう}が心にあつ。故^{ゆえ}に以^{おも}為^えらく上宮の春色、四^し時^じ目に在りと。天寶中、後宮の良家の女万数、天子をして顧^こ盼^{はん}の意無からしむ。

[訳]天子が中国全土の民風を視察したり、五岳で封禪の儀式を執り行ったりする際、あるいは驪山で過ごす雪の夜、上陽宮で迎える春の朝、行けば天子と同じ輦に乗り、止まれば天子と宴を共にした。こうして楊貴妃はその美貌にさらに磨きをかけ、ことばを機敏にあやつり、歌い舞い楽しく語らい、わかくあでやかで言葉巧みにご機嫌をうかがって、天子のみ心を満足させた。だから天子は上陽宮では春の景色をいつも見ることができると満足したのである。天寶中、後宮に良家の娘は万を以て数えるほどに多くいたが、天子をふりかえらせることはまったく無くなってしまった。

【澤崎】「顧盼」―「盼」字、底本のままであるが、汪本・周本・下定論文は共に「盼」に改める。文集「伝」は「眇」、金沢本は「眇」の異体字とされる「目+巧」(右傍に「メム」)。「盼」は音ケイ(xi)、「眇」は音ハン(pan)、「眇」は音ベン(mian)。それぞれ別字であるが、『文選』などでもテキストによって通用されることがある。ここでは底本「盼」のままとする。明鈔本麗情集「伝」も「盼」。ただし、明鈔本栄華「伝」は「眇」。

この段落は、「伝」にあつて「麗」に無い部分、「麗」にあつて「伝」に無いもの、配置の場所がちがうものがある。

「伝」にあつて「麗」に無い部分。その第一。「伝」が「雖有三夫人・九嬪・

二十七世婦・八十一御妻」と数字を挙げて、後宮の女が多いことを表現しているのに対して、「麗」は、「後宮良家女萬數」と、後宮に女が多いことをさらりと述べている。「伝」が数字を挙げるのは、「伝」が事実に近いことを強調しようとする姿勢の表れである。「澤崎」は、これを「具体的な数字を挙げて物語りの細部にリアリティを与えようとする散文的表現」だという。それはそうだが、リアリティを与えようとするのは、事実であることを強調することで、多くの人々が持つ玄宗の貴妃への惑溺と、「尤物」貴妃を咎める思いを引き出す役割を果たしていることを見なければならない。これに続く「伝」の「自是六宮無復進幸者」が「麗」にないのは、「麗」では上(第3段落)ですでに「自是天子不早朝、后夫人不得侍寝」と述べているので重複を避けたものだろう。

第二は、「伝」の「自是六宮無復進幸者。非徒殊豔尤態、獨能致是、蓋才智明慧、善巧洪佞、先意希旨、有不可形容者」。「伝」は貴妃の美貌とともにその「善巧洪佞」(「善巧」は利巧なこと。「洪佞」、「洪」は美麗の意だが、ここは「便」と音通で「便佞」の意と取る)を強調し、天子を籠絡する手練手管があまりに見事で、表現のしようがないという。「伝」は明確に「尤物」貴妃が悪女であることと、そのしたたかさを述べている。

「麗」にあって「伝」に無い部分。「麗」の「故以為上宮春色、四時在目」である。これは貴妃が天子の心をとらえたことの具体的表現であり、「伝」が貴妃の手練手管に驚きあきれのとはちがう。天子が、貴妃の色香のとりことなって心地よく満足しているその思いを、「伝」よりも具体的に表現している。

配置の場所がちがうもの。「伝」では前段に出ていた「由是治其容、敏其詞、婉變萬態、以中上意、上益嬖焉」が、「麗」では「妖其容、巧其詞、歌舞談笑、婉變便佞、以中上心」と、やや語を変えてこの段に配置されている。「麗」のこの部分は、貴妃の「尤物」ぶりを表現するが、しかし、「伝」よりはあっさりしている。また「伝」の「嬖」の語がないのは、天子の貴妃への情愛を「嬖」(身分の低い女を特に寵愛する)という批判性の強い語で表したくはないからだろう。

ただし、「麗」が全体として、愛らしくひたむきな貴妃像を提示しよう

していることから見ると、この「妖其容、巧其詞、歌舞談笑、婉變便佞、以中上心」の表現に、私はやや違和感を覚える。とりわけ「便佞」の語は「麗」が提示している貴妃像と矛盾する。想像の域を出ないが、この部分は、「麗」が「伝」を下敷きにして改変する際に、「伝」の文字を、未整理のままに残してしまったのではなからうか。

[5]

[伝]叔父昆弟、皆列在清貫、爵為通侯。姉妹封國夫人、富埒王室、車服邸第、与大長公主侔、而恩澤勢力、則又過之。出入禁門、不問名姓。京師長吏為之側目。故當時謠詠有云、生女勿悲酸、生兒勿喜歡。又曰、男不封侯女作妃、君看女卻為門楣。其天下心羨慕如此。

[麗]叔父昆弟、皆為通侯[侯]*。女弟女兄、富埒王室。車服制度、爵邑邸第、與大長公主*侔矣。恩澤勢力則又過之。出入禁門不問、京師長吏為之側目。

[訓]叔父昆弟、皆な通侯と為る。女^{じよてい}弟女^{じよけい}兄、富むこと王室に埒^{ひと}しく、車服制度、爵邑邸第は大長公主と侔^{ひと}し。恩澤勢力則ち又た之れに過ぐ。禁門に出入りするに問われず、京師の長吏之れが為に目を側^{そば}だつ。

[訳]彼女の叔父や兄弟はみな、高貴な官位に列せられ、姉妹たちは、その富は王室に等しく、車・服飾・邸宅などは天子のおばたちと同等であった。しかも天子の彼らへの恩沢と実際の権勢は、さらにそれ以上だった。皇居の門を出入りするにも、姓名を問われることがなく、都の高級官僚たちはこれを横目で見るとしかないのであった。

この一段、いずれも貴妃一族の栄華と権勢を述べる。ただし、「麗」には、「伝」の「皆列在清貫」がなく、「伝」の「姉妹封國夫人、富埒王室」が「女弟女兄、富埒王室」と四字句にそろえられていて、「伝」よりも記述があっさりしたものになっている。

大きなちがい。「伝」にあつて「麗」にない部分がある。「伝」の「故當時謠詠有云、生女勿悲酸、生兒勿喜歡。又曰、男不封侯女作妃、君看女卻為門楣。其天下心羨慕如此」が、「麗」にはない。「伝」は、貴妃一族の栄耀栄華・専横ぶりをたっぷり書きこむことで、読者の貴妃とその一族へのそねみと反撥をひきだす工夫をしている。「麗」にこれがないのは、貴妃への反撥を弱めるね

らいがあると考えられる。すなわち、「麗」は、「歌」の天子と貴妃の姿に、二人の形象を接近させている。

[6]

[伝]天寶末、兄國忠盜丞相位、愚弄國柄。及安祿山引兵嚮闕、以討楊氏為辭、潼關不守。翠花南幸、出咸陽道、次馬嵬亭。六軍俳徊、持戟不進。從官郎吏伏上馬前、請誅錯以謝天下。國忠奉釐纓盤水、死於道周。左右之意未快、上問之、當時敢亦言者、請以貴妃塞天下之怒。上知不免、而不忍見其死。反袂掩面、使牽之而去。蒼黃展轉、竟就絕於尺組之下。

[麗]天寶末[末]、兄國忠盜丞相位、竊弄國柄。羯胡*亂燕、二京連陷。翠華南幸、駕出都西門。百余里、六師俳徊、擁戟不行。從官郎吏、伏上馬前、請誅錯以謝之。國忠奉釐纓盤水*、死於道周。左右之意未快。當時敢言者、請以貴妃塞天下之怒。上慘容但[怛]心、不忍見其死。反袂掩面、使牽之而去。拜于上前、回眸血下。墜金鈿翠羽於地、上自収之。嗚呼、蕙心紈質*、天王之愛不得已[已]、而死於尺組之下。叔向母云、其美必甚惡。*李延年歌曰、傾國復傾城*、此之謂也。

[訓]天寶末、兄國^{こくちゆう}忠丞相の位を盗み、^{ひそ}かに国柄を弄す。羯^{はつこ}胡燕を乱し、^{にけい}二京^{しきり}連^らりに^おつ。翠華南幸し、駕して都の西門を出ず。百余里、六師俳徊し、戟を擁して行かず。從官郎吏、上が馬前に伏し、請うに^そ錯を誅して以って之れに謝せんことを請う。国忠^{りえい}釐纓盤水を奉じて、道周に死す。左右の意^{いま}未^いだ快からず。当時敢えて言う者有り、貴妃を以て天下の怒りを^{ふさ}塞^さがんことを請う。上^{さん}慘^{さん}容^{よう}怛^{たつ}し心、其の死を見るに忍びず。袂^{もと}を^{かえ}反^かえして^{かお}面^おを掩い、之れを^ひ牽^かかせて去らしむ。上^{しょう}が前に拜するに、^{ひとみ}眸^めを^{めぐ}ら^せせて血^く下^だる。金^{きん}鈿^{きん}翠羽を地に^お墜^おすに、上^み目^みずから之れを収む。嗚呼、蕙^あ心^あ紈^い質^{しつ}*、天王の愛も^や已^むむを得ずして、^{せき}尺^{せき}組^{ぐみ}の下に死す。叔^{しゆく}向^{きやう}が母云う、其の美なるは必ず甚だ悪なりと。李延年歌いて曰く、傾国復た傾城と。此の謂いなり。

[訳]天寶の末、貴妃の兄国忠は丞相の位を盗み取り、国家の権力をもてあそんだ。羯胡(安祿山)は燕の地を乱し、二つの都は陥落した。天子のみ旗は南に移ることとなり、車馬に乗って都の西門を出た。行くこと百余里、天子の軍隊は行きつ戻りつして、戟を持った兵士たちは進もうとしない。天子の

側近である官僚たちは、天子の馬前にひれ伏して、漢の竈^{ちようそ}を殺したように、騒ぎの元凶である国忠を殺して天下にわびましようとお願いをした。国忠はから牛の毛で作った質素な冠ひもをつけ、水を盛った盤に剣をのせて道ばたで死んだ。しかし左右の者たちはそれでもまだ気がおさまらない。この時思い切って申し上げる者がいて、楊貴妃を殺すことで天下の怒りを静めるように願い出たのである。天子は悲痛な面持ちで胸もはりさけんばかり、貴妃の死を見るにしのびなかった。たもとをかえして顔をおおい、彼女をひっぱってゆかせた。貴妃が天子のおん前で最後の拝謁をすると、天子は貴妃をみつめかえして血の涙が流れ落ちた。(殺された貴妃が身につけていた)黄金のかんざしと緑の羽根飾りが地に落ちると、天子はおん自らこれをひろわれた。ああ、貴妃の美しい身心と天子の愛をもってしても、これはどうしようもなかったのだ。晋の叔向の母は、「美しすぎる者は、必ず悪だ」といい、李延年は「傾国は復た傾城」だと歌ったが、まさにこのことを言うのだ。

【澤崎】「其(甚)美必甚悪」—「其」字、傳校・明鈔本ともに「甚」に作る。汪本・下定論文ともに「其」字のままとするが、程毅中『唐代小説史』(文化芸術出版社、1990)143頁所引の当該箇所、及び周本はともに「其(甚)美必甚悪」と「甚」字に改める。周本はこの句に注して、『左伝』昭公二十八年に「甚美必有甚悪」とあることを指摘する。(「其」をとる下定論文も注[6]に『左伝』の同じ条を引く) 「甚美必甚悪」に続いてこれと対をなすいま一つの引用に「傾國復傾城」とあり、「傾國一傾城」と「傾」字を反復する。したがって、『左伝』からの引用も「甚美一甚悪」と「甚」字を反復することに着目した引用であったと考えられる。「甚」に従う。

この一段は、各処、異なる。安祿山の叛乱について。「麗」は「天寶末、兄國忠盜丞相位、竊弄國柄。羯胡亂燕、二京連陥」と、「伝」が明示する安祿山の名を出さないし、「討伐」の旗印「楊氏を討つを以て辞と為す」を欠いている。それだけ、現実感は稀薄となり、「尤物」貴妃を批判する筆鋒は鈍ることになる。

貴妃が殺される直前。「拜于上前、回眸血下」、貴妃が天子に最後の挨拶をし、天子が血の涙を流したこと、「伝」にこの記述はない。「回眸血下」は、

「歌」42句に「迴看淚血相和流」とあるのを撰取している。この二句は、天子をひきつけてやまない貴妃の美貌、愛らしさと、その虜となった天子を鮮やかに表現しているだろう。

貴妃が殺される場面。「墜金鈿翠羽於地、上自収之」の二句も「伝」にはない。これは、「歌」39.40句の「花鈿(花のかんざし)地に^す委てられて人の収むる無し、翠^{すいぎ}翹^{よう}(かわせみの羽の髪飾り)金^{きん}雀^{じゃく}(雀をかたどった黄金のかんざし)玉^{ぎよく}搔^{そう}頭^{とう}(宝玉のこうがい)」を改変している。「歌」では花鈿・翠翹・金雀等は地に棄てられたままであるものが、「麗」では天子自らがこれを収めている。この相違により、「歌」では貴妃のあわれさが強調されているものを、「麗」では天子の貴妃への愛の深さを強調することになっていると考える。(7)

「嗚呼、蕙心紈質、天王の愛も已むを得ずして、尺組の下に死す」と記され、貴妃の身心の美しさへの賛辞がなされると同時に、これにより玄宗の悲嘆がより深く表現されている。

「伝」の「蒼黄展轉」、貴妃があたふたと慌ただしくよろけつつひかれてゆくという表現が「麗」にはない。「麗」は、それだけ、「伝」に比べて貴妃の死を美しく詠い、みじめさの表現を少なくして、ここでも「歌」に接近している。

「麗」には、「伝」にない「叔向母云、其美必甚惡。李延年歌曰、傾國復傾城、此之謂也」がある。玄宗の貴妃への思いこそは、『左伝』や『漢書』にいう(「叔向母……」「李延年歌……」の語注を見よ)、天子が「尤物」に惑溺されることの典型的なのだというのである。これは、白居易の「李夫人」が、「嬖^{へい}惑^{わく}を鑑^{かん}むるなり」を目的にするのに接近している。また「李夫人」の結句に「人は木石に非ず皆な情有り、如^しかず傾城の色に遇わざるに」というのと、その内容はほぼ同じである。「麗」は天子を惹きつけてやまない、美女の^{おの}目^めずからなる「悪」を述べ、その虜となってしまわざるを得ない天子の思いの深さを表現している。「伝」のように「尤物」貴妃の主体的・能動的な「悪」を強調する筆致ではない。

[7]

[伝]既而玄宗狩成都、肅宗受禪靈武。明年、大凶歸元。大駕還都、尊玄宗

為太上皇、就養南宮、自南宮遷於西宮内。時移事去、樂盡悲來。每至春之日、冬之夜、池蓮夏開、宮槐秋落。梨園弟子、玉琯發音、聞霓裳羽衣一聲、則天顏不怡、左右歔歔。三載一意、其念不衰。求之夢魂、杳不能得。

[麗]既而玄宗狩*成都、肅宗受命靈武。粵*明年、大赦改元。大駕還都、駐六龍于馬嵬。道中君臣相顧、日月無光、不翼。曰*、父子堯舜、天下大和、太上皇、就養南宮*。宮槐夏花、梧桐秋雨、春日遲遲兮、恨深。冬夜長長兮、怨急。自死之日[日]、齋之月、莫不感皇容、悼宸衷*。每朱樓月曉、淥池*冰散、梨園弟子、玉琯一聲、聞電[霓]裳羽衣曲、則天口[顏]不怡、侍兒掩泣。三載一意、其念不衰[衰]。自是南宮無歌無[舞]之思。求諸夢而精魂不來、求諸神而致誠莫敢。

[訓]既にして玄宗 成都に狩りし、肅宗 命を靈武に受く。粵^こに明年、大赦して改元す。大駕 都に還^{かえ}るに、六龍を馬嵬に駐^{とど}む。道中 君臣相い顧みるに、日月光無く、翼^{たす}けあらず。曰^こに、父子は堯舜のごとくにして、天下は大いに和し、太上皇は南宮に就養*さる。宮槐に夏の花ひらき、梧桐に秋の雨ふる、春の日は遅遅として、恨み深し。冬の夜は長長として、怨み急なり。死するの日・齋の月^{より}、皇容を感ぜしめ、宸^{しんちゆう}衷^をを悼^{いた}ましめざる莫し。朱樓に月^{あか}く、淥^{りよくち}池^こに泳^おり散じ、梨園の弟子、玉^{ぎよつかん}もて一声し、霓裳羽衣の曲を聞く毎^{ごと}に、則ち天顏^{よろこ}ばず、侍兒^{えんきゆう}泣す。三載一意にして、其の^{おも}い衰えず。是れ^{より}南宮に歌舞の思い無し。諸れを夢に求むるに、精魂は来たらず。諸れを神に求めて誠を致さんとするも、敢えてする莫し。

[訳]やがて玄宗は成都に居所を移し、肅宗が靈武で皇帝の位を譲り受けた。翌年には大赦令が出されて改元した。天子は都に帰還したが、(その途中)天子の車駕を馬嵬に留められた。道々、君臣は互いに顧みた、日月に光はなく、天子たちを助けることはなかった。(だがしかし、都にもどると)天子父子はまるで堯と舜とのようで、天下は太平であり、太上皇は南宮で孝養を尽くされることになった。宮殿のえんじゅは夏に花開き、梧桐には秋に雨が降り、春の一日は遅々として時が過ぎゆき、貴妃を失った痛恨は深く、冬の夜はあまりに長く、貴妃を失った悲しみがすんどくつきあげてくる。貴妃が亡くなった日に始まり、貴妃を悼んでのものいみの月、天子のお顔を曇らせ、天子

のみ心を痛めないことはなかった。朱塗りの楼に月の光のさえる時、清らかな池に氷が散る時、梨園の楽人たちが玉笛の音を奏で、霓裳羽衣の曲が聞こえるそのたびに、天子は悲しげな顔になり、左右のものたちも顔をおおって泣くのだった。こうして三年、玄宗の貴妃への思いはいささかも衰えることがなかった。このころから南宮で歌舞を見たいとはまったく思わなくなられたのだ。彼女を夢の世界でも追い求めたが、その魂はやっては来なかった。彼女の魂を呼んでほしいと神にもすがろうとしたのだが、それができるものはいなかった。

【澤崎】「不翼日[翌日]」—汪本・周本は「不翼日」に、張本は「不翼(翌)日」に作り、いずれも後文の「父子堯舜、天下大和」に続ける。これに対して下定氏は、「不翼」で読点を施し、この二字を前文に続けて「翼けあらず」とよむ。その上で「日」を発語の助字とみて、後文に続けて「日に」と読む(八五頁)。確かに、麗情集「伝」は、「嗚呼、蕙心紈質、天王之愛」、「粵明年、大赦改元、大駕還都」、「嘻、女徳無極者也。死生大別者也」(いま、英華「伝」のままに引く)など、場面の変わり目に詠嘆の語を置き、これに続けて描写的な対句を置くことに表現上の一特色がある。ここも「日」の後に、「父子堯舜、天下大和」の四字の対句が続く。その点を考慮するならば、下定氏の読みも有り得よう。しかし、傳校、明鈔本ともに「翌日」とすることから、筆者は正文を「不翌日」とし、「翌日ならずして」と読んで、日を経ずしての意に解する。蜀からの帰途、馬嵬に馬を止めて沈痛な思いに陥っている玄宗一行ではあったが、その後長安に帰還するや、日を経ずして「父子は堯舜にして、天下は大いに和す」(玄宗父子は堯舜のごとく有徳であり、天下は大いなる平和に立ち返った)御代となり、たちまちにして平和がもどったのであった。——「不翌日」という語は、唐・権徳輿の「唐故潤州丹陽県尉李公夫人范陽盧氏墓誌銘并序」に、盧氏が病んで亡くなったことを、「既而奄忽遘疾、不翌日而大漸」(既にして奄忽として疾に遘い、翌日ならずして大いに漸む)と記す例がある。

「麗」は玄宗を「天子」「上」「天王」「太上皇」「漢天子」「帝」「君王」「上皇」と呼び、玄宗の思いを、「上心」「皇心」といい、玄宗の名を出さ

ないのが原則である。唯一、ここで玄宗の名が出るのは、天子が代わったことを述べるのに、玄宗・肅宗の名を出すしかないと判断したからだろう（識語に『玄宗内伝』の語があるが、これは書名だから玄宗自身を指したものではない）。「麗」が、史実を記述し、あるいは「伝」のようにそれを利用するのではなく、仮構の愛情譚としての性格を強めようとする態度は、ここでも変わっていない。

「麗」は、都に帰る途中、馬嵬での情景を「大駕還都、駐六龍于馬嵬。道中君臣相顧、日月無光、不翼」と記す。この部分、「伝」にはない。「六龍」は天子の六頭立ての馬車。それを日月は助けてくれない。「道中君臣相顧」は、「歌」55句に「君臣相顧盡霑衣」とあるのを採り入れている。「日月無光、不翼」は、「歌」45.46句に「峨嵋山下に行く人少なく、旌旗に光無く日食薄し」とある、貴妃のいない寂寥の表現（玄宗の敗残・零落ではない）を摂取しているだろう。

都に帰還後の記述、「伝」は「自南宮、遷於西宮」と、肅宗が玄宗を疎んじて南宮から西宮へと移したことを述べるが、「麗」にはこれがない。「麗」は、「伝」のように玄宗の零落を描こうとはしていない。「麗」の次の記述「父子堯舜、天下大和、太上皇、就養南宮」によってその事は明らかである。「麗」は、肅宗が玄宗を疎んじたことを記さない。反対に、両者は堯舜のようにすばらしい皇帝であり、天下はよく治まったと述べている。玄宗の零落に筆を向けるのではなく、ひたすらに貴妃を失った玄宗の悲哀に焦点を合わせるための工夫である。

以下、「麗」の貴妃を失った玄宗の悲哀の描写は、「伝」よりも相当に詳細であり、思いがこもっている。また、「歌」の表現を吸収し手を加えている。

「麗」は、「宮槐夏花、梧桐秋雨」と貴妃無き日々の寂しさを述べるが、これは「歌」62句に「秋雨梧桐葉落時」とあるのを襲う。また「春日遲遲兮、恨深。冬夜長長兮、怨急」は、「歌」の69句「遲遲鐘漏初長夜」を、騷体（『楚辞』体）にアレンジして、玄宗の貴妃を失った怨恨が、深く感じられるように工夫している。

「霓裳羽衣曲」こそは貴妃を思うよすがとなる歌曲だが、「麗」はこれを、

「每朱樓月曉、淥池冰散、梨園弟子、玉琯一聲、聞霓裳羽衣曲、則天顏不怡、侍兒掩泣。三載一意、其念不衰。自是南宮無歌舞之思」と描写して、貴妃を思ってこの曲を聞けば、貴妃のいないことを痛切に知らされ、かえってつらくなるがゆえに、この曲を聞くことをしなくなったと、貴妃を忘れることができない天子の思いを、丁寧に記している。

続いて「思求諸夢、而精魂不來。求諸神而致誠、莫敢」と述べるのは、「伝」が「求之夢魂、杳不能得」というのと骨子に差はない。いずれも、「歌」の73.74句「悠悠生死別經年、魂魄不曾來入夢」を受けての表現である。だし、「麗」が「求諸神而致誠」というのは、「歌」の76句に「能以精誠致魂魄」とある、「精誠」の語を意識しているだろう。

この段落、「麗」は、ほとんど「歌」と同じ思い、同じ情感を記している。「伝」が、後段の仙界での場面を引き出すために、玄宗の悲嘆を描くのは描いているが、その零落を強調する筆致であり、かつ簡潔にまとめているのとは、表現の姿勢に大きなちがいがあある。

なお『周』は、「伝」の「既而玄宗狩成都、肅宗受禪靈武」について、次のようにいう。おおざっぱに見れば史実に合っているようだが、正確には、至徳二載(757)、帰京してはじめて正式な権力の交代が行われたのだからこの記述は誤っている。これに対して「麗」は、それを正確に認識しているから、「受禪」とはいわず、「受命」の語を用いているのだ(53.54頁)。

だが、繰り返し述べるように、「伝」はその主張を際立たせるために、史実を利用し、改変している。ここでは、貴妃が亡くなって悲痛の極にある玄宗が、あまつさえ肅宗に天子の座を奪われて、その寂寥とみじめさがいっそう際立つように、こうした表現がなされている。これに対して「麗」は、愛する人を失った天子の悲嘆に焦点を合わせて、むしろ、玄宗から肅宗への権力の移行のことは、史実とは正反対といってもいい記述にしているのである。

[8]

[伝]適有道士自蜀來、知皇心念楊妃如是、自言有李少君之術。玄宗大喜、命致其神、方士乃竭其術以索之、不至。又能遊神馭氣、出天界、沒地府以求之、又不見。又旁求四虛上下、東極絕天海、跨蓬壺、見最高仙山。上多樓闕、

西廂下有洞戸、東嚮、纏其門、署曰玉妃太真院。方士抽簪叩扉、有雙鬟童女出應門。方士造次未及言、而雙鬟復入。俄有碧衣侍女又至、詰其所從來。方士因稱唐天子使者、且致其命。碧衣云、玉妃方寢、請少待之。于時雲海沈沈、洞天日暮。瓊戸重闔、悄然無聲。方士屏息斂足、拱手門下。

[麗]成都方士能乘氣而遊上清*。感皇心追念楊貴妃不已[已]。乃上大羅天*、入地府*、目眩心搖、求之不見。遂駕瑯輿*、張雲蓋*、浮碧落、東下海中三山、遂入蓬萊宮中。金殿西廂有洞戸、闔其門。署曰玉真太妃院。扣門久之、有青衣玉童出。方士傳漢天子命、既入瓊扉重闔、悄然無聲。方士息氣重足、拱手門下。

[訓]成都の方士、能く氣に乗り^よ上清に遊ぶ。皇心 楊貴妃を追念して^やまざるに感ず。乃ち大羅天に^のぼり、地府に入るも、目眩^{まぶ}しく心揺れて、之れを求むれども見えず。遂に^るう^よ瑯輿に駕し、雲蓋を張り、碧落に浮かび、東のかた海中三山に下り、遂に蓬萊宮中に入りたり。金殿西廂に^{どう}戸有りて、其の門を^と闔ず。署して曰く、玉真太妃院と。門を^{たた}くこと之れを久しくするに、青衣の玉童の出ずる有り。方士 漢の天子の命を伝うるに、既に入るや^{はい}ひ^ひ瓊扉重く^と闔じ、悄然として声無し。方士 氣を^ひそめ^め足を^{かさ}ね、手を門下に^まぬく。

[訳]成都の方士で、氣に乗り天上の仙界に遊ぶことのできる者がいた。皇帝が貴妃を追慕してやまないその思いに感じ、天界に上り、冥土に入ったが、目はくらみ心臓はどきどきして、貴妃を探しても見つけることができない。そこで、瑯の玉の御輿に乗り、雲蓋を張って空を飛び、東の方、海中の三山に下りて、蓬萊宮の中に入っていった。金殿の西のひさしに入り口があり、その門は閉ざされていた。門には「玉真太妃院」と記されていた。扉を何度も叩くと、青衣の童子が出てきた。方士は漢の天子の使いであることを伝えたところ、童子は中へ入っていき、扉は重く閉じられたままで、ひっそりとして何の音もしない。方士は息をひそめ、つつましく足をそろえ、門の下で手をこまねいて時の来るのを待った。

この一段、まず、方士が、貴妃を探索するに至る記述に微妙な違いがある。方士についての説明、「麗」が詳しい。また「伝」では、「知皇心念楊妃如是」と冷静に「皇心」の「是の如き」を「知」ったというが、「麗」では「皇

心の楊貴妃を追念すること已まざるに感じ」と、方士が天子の思いの切実さに、「感」、感動したと、方士と天子との共感を強調する筆致になっている。この「感」の一字は、「歌」77.78句に「為感君王展轉思、遂教方士殷勤覓」とある「感」の字を採ったものだろう。

また「伝」では、「玄宗大いに喜び、其の神を致さんことを命じ」て、方士は探索を始めるのだが、「麗」では、方士は「皇心」に感動すると、命ぜられることなく、「大羅天に^{のぼ}上」っている。天子の貴妃への思いに感じての、方士の積極性が強調されている。

以下、この段落でも、貴妃即ち仙界の「玉妃」の描き方に大きなちがいがあ

る。蓬萊宮の「太真院」を探しあてるまでの記述。「麗」の「碧落」は青空。「歌」81句に「上は碧落を窮め下は黄泉」とあるのを撰取している。「麗」の「目眩心搖、求之不見」は、「歌」の82句「兩處茫茫皆不見」を四字二句にしたもの。「金殿西廂」は、「歌」89句に「金闕西廂叩玉扃」とあるのを取り入れている。「麗」は、「歌」の語を取り入れ、「歌」を忠実に解釈している。

「玉真太妃院」に着いてからの記述。この「玉真太妃院」は「玉妃太真院」であるべきものの、書写時もしくは刊刻時に生じた単純なミスだろう。『周』は、明朝で重刊時に生じた、書写者が無教養であるがゆえの膨大な個別の誤りの一例だとする(65頁)。

この段落、「伝」に比べて「麗」はずっと簡潔である。「伝」は何ゆえに長いのか？それは、仙界の玉妃をもったいぶって、次の段落で登場させるためである。「伝」ではまず「双鬢の童女」が応対し、方士がこれにあわただしく応えようとする(方士の態度が小者っぽく描かれている、これと反対に、玉妃側は尊大でもったいぶっている)、童女は門中に入っていってしまい、代わって碧衣の侍女が出てきて「其の^よ従りて来たるところを^と語る」、高飛車に、どこから来たのかと問い詰めるのである。しかも来意を聞いた侍女は、玉妃はいま寝ているからしばらく待てという。さらに、方士は礼儀正しく手を胸前にそろえ、息も静かに長時間待ち、ようやくにして玉妃は登場してくる。玉妃側は、尊大でもったいぶっている。これが「伝」のこの段である。

では「麗」はどうか？「伝」に見える玉妃の尊大さを示す記述は、「麗」にはない。取り次ぎは、「青衣の玉童」だけである。「伝」のように二段階にはなっていない。これだけでもかなり簡略化されている。「玉妃は寝ている」などという使者を軽んじたことはもちろんいわない。最後のしばらく待つ場面は「既入瓊扉重闔、悄然無聲。方士息氣重足、拱手門下」であり、これは「伝」の最後とほぼ同じである。だが、「麗」のこれだけの記述であれば、玉妃を尊大に感ずることはない。天子の使いがやってきたという重大事なのだから、貴妃が中でどのように驚いているのか、あるいはうろたえているのか、しかとはわからないが、中の貴妃の様子を読者は想像することになる。

[9]

[伝]久之、而碧衣延入。且曰、玉妃出。見一人冠金蓮、被紫綃、佩紅玉、曳鳳鳥、左右侍者七八人。揖方士、問皇帝安否、次問天寶十四載已還事。言訖憫默。指碧衣女取金釵鈿合、各析其半、授使者曰、為我謝太上皇、謹獻是物、尋舊好也。方士受辭与信、將行、色有不足。玉妃固徵其意、復前跪致詞、請當時一事、不聞于他人者、驗於太上皇。不然、恐鈿合金釵、負新垣平之詐也。

[麗]海上風微、洞天*日暖、乃見仙女數人、相隨出戶、延客、至玉堂。堂上褰九華帳[帳]、有一人冰雪姿。芙蓉冠、露綃帔*。儼然如在姑射山*、前揖。方士傳漢天子命、言未終、退立慘然、憶一念之心、復墮下界。因泣下、使青衣小童取金釵一股・鈿合一扇、奉太上皇。苟心如金堅如鈿、上為天人、下為世人、重相見時好合如舅[舊]。方士受其信將行、色有不足。玉妃固徵其意、復前跪致詞、曰、請付當時一事、不聞于人者、驗[驗]於漢天子。畏金釵鈿合、負新垣平之詐*也。

[訓]海上 風^{かす}微かに、洞天 日は暖かにして、乃ち仙女数人の相い随いて戸を^い出ずるを見たり。客を^{まね}延き、玉堂に至る。堂上には九華の帳を^か褰^かげ、いちに^ん人の冰雪の姿なる有り。芙蓉の冠、露^るし^{よう}綃^ひの帔。儼然として姑^こ射^や山^{さん}に在るが如し、^す前^すみて^{ゆう}揖す。方士 漢の天子の命を伝う、言未^{いま}だ終わらざるに、^{しり}退^ぞき立ちて慘然たり。一念の心、復た下界に^おちん^こことを^おおも^もう。因りて^な泣^みだ下る、青衣の小童をして金釵一股、鈿合一扇を取らしめ、太上皇に奉ず。苟くも心の^{きん}釜^んの如く、堅きこと鈿の^{ごと}く^んば、上は天の人と^な為り、下は世の人と為り、^{かさ}重^ねて相い^ま見^みゆる時、好合すること旧の

如し。方士^そ其^しの^る信^しを受けて^ま蔭^さに行かんとするに、色に足らざる有り。玉妃固く其の意を徴すれば、復た^す前^すみ^ひ跪^ぎま^ずき詞を致して、曰く、「請う当時の一事の、人に聞こえざる者もて、漢の天子に^あ駭^らた^められんことを。鈿合金釵の、新^{しん}垣^{えん}平^{へい}の^い詐^つわりを負うを恐るるなり」と。

[訳]海上に風はおだやかに吹き、仙界に日は暖かである。しばらくすると仙女数人がつれだつて戸から出てきて、客を手招きし、玉堂に案内してくれた。堂上には九華の刺繍をほどこした帳がかかげられ、そこに雪のように白い肌の女性がいた。芙蓉の冠をかぶり、つゆしたたるような薄絹のうちかけをかけている。おごそかで、姑射山にいるようであり、女は進みでて腕を前で組み合わせる丁寧な挨拶をした。方士が漢の天子の命令を伝えると、まだ言い終わらないうちに、身を退いて悲しげなようすである。そして、「天子をお慕い申し上げるこのひとすじの思いのゆえに、またふたたび下界に落ちたいと思うのでございます」という。このために涙をはらはらと流し、青衣の童子に金釵ひとふりと螺鈿のはこを取らせ、「太上皇に謹んでさしあげます。この金の簪・螺鈿の箱のように私たちの心が堅ければ、上は天の人となり、下は世の人となつて、きっと再びお会いして、昔のようになかむつまじくすることでございましょう」という。方士は、その証拠の品を受け取つて、立ち去ろうとしたが、何か不満な顔つきである。玉妃がその意向をつよく問いただすと、方士はまた玉妃の前まで進み出てひざまずき、申し上げた。「どうか、当時のことで、他の人間が知らないもので、漢の天子が確かめられるものをお示してください。そうでなければ、螺鈿の小箱も金の簪も、あの漢の新垣平のように詐欺ではないかと疑われるのではないのでしょうか」と。

仙界で貴妃と方士が会う場面。この一段も、重大な相違がある。

「麗」では、「方士 漢の天子の命を伝う。言未^{いま}だ終らざるに、退き立ちて慘然、一念の心、復た下界に^お墮^ちんことを^お憶^もう」となつていて、方士の言葉を聞いたとたんに、貴妃は下界に墮ちたいとの思いを表明している。すなわち「伝」のように、玉妃が貴妃であることの証拠として、これが最後に配置されるのではなく、貴妃の愛情の率直な発露としての性格をもたされて、方士と会つたその始めに、「言未だ終らざるに」の語を加えて、この語が

置かれている。これにより、玄宗を愛する玉妃の思いと姿が強調されている。玉妃の嘆きは強い。「麗」の「憶一念之心……」は、「伝」では次の段に「由此一念、又不得居此、復墮下界、且結後縁。或为天、或为人、決再相見、好合如舊」と見える。思うに、この部分については、明らかにこれは、「伝」が先である。「伝」においては、七月七日の玄宗との誓いを思い出した後にこの一文が来る。これは自然である。それが「麗」では、方士の来意を聞いたとたんに、「此の一念」を起こしており、唐突の感を免れない。「伝」と比較すればこそ、そう思うのかも知れないが、「麗」は、この一段が、玉妃(仙界の貴妃)が天子を愛する思いをほとぼしらせ永遠の愛を願うところであるから、これを、いきなり方士との会話の冒頭に持ってくることで、玉妃の愛の深さと切なさ、天子を愛する玉妃の愛らしさを強調しようとしたのであろう。いま一つ、この文の位置がちがうだけではなく、「麗」の「憶一念之心、復墮下界」と、「伝」の「由此一念、又不得居此、復墮下界、且結後縁」にも大きなちがいがある。「伝」は「此ここに居るを得ず」、自らの意思で下界に墮ちるのではなく、そうせざるを得ない力—それは仙界の掟だろうが—によって下界に墮ちることになるという。これに対して、「麗」では、そのような他律的な力は働いていない。彼女は自らの一途な思いによって、その思いに従い、下界に墮ちることを思うのである。ここにも、玉妃の天子へのひたすらなる愛の表現を見ることができる。

この最も重大な相違に即応して、「伝」との他のちがいも、みな貴妃の形象をより愛らしく、よりしとやかにする工夫がなされている。そもそも登場の場面からして、「伝」の玉妃が尊大であるのはまるでちがう。「伝」は、「見一人冠金蓮、披紫綃、佩紅玉、曳鳳舄、左右侍者七八人」となっていて、大物の仙女のまわりに侍者が七八人、ということで、この玉妃は位の高い仙女だということが示されている。これに対して、「麗」では、あたたかくおだやかな情景の中、数人の仙女たちがさんざめきながら登場し、方士をひっぱっていき、堂上の貴妃のもとに連れていく。華やかで明るく、心安らぐ感じがする。

なお、貴妃が「九華の帳を褰げている」のは、「歌」の92句に「九華帳裏夢魂驚く」というこの「九華帳」の語を用いている。貴妃を「冰雪姿」と形

容するのも、上に述べたように、「歌」88句の「雪膚」を承けたものである。

次いで玉妃が身につけていた物を、「伝」は「冠金蓮(金の蓮の冠)、被紫綃(紫の薄絹)、佩紅玉(紅の佩び玉)、曳鳳鳥(鳳凰の刺繍を施した靴)」と四句も重ね、全身これきらびやかで、玉妃が高位の仙女であることを強調している。この部分、「麗」は「芙蓉冠、露綃帔」と二句にまとめている。「芙蓉」は「歌」では、14句「芙蓉の帳 春暖かにして春宵を度る」、58句「太液の芙蓉 未央の柳」、60句「芙蓉は面の如く柳や眉の如し」と三度も登場する。芙蓉の艶やかさ・ひたむきさ(8)を貴妃に似合うものとする点で、ここも「麗」は「歌」を襲っている。また、「芙蓉」は「金蓮」の冠よりも素朴であり、「露綃」も「紫綃」の「紫」という高貴な色ではない。「伝」が玉妃(仙界の貴妃)の高貴さを際立たせようとしているのに対して、「麗」は玉妃の女性らしい美しさに焦点を当てている。

次いで、「麗」では上に述べたように、いきなり「一念の心」が飛び出すのだが、「伝」では、方士の言葉を聞いた玉妃は、碧衣の侍女に金釵・鈿合を取らせ、それを半分に割って方士に与えることになっている。それに付す言葉は冷静で短い。「為我謝太上皇、謹獻是物、尋舊好也」。この部分、「麗」は「使青衣小童取金釵一股・鈿合一扇、奉太上皇。苟心如金堅如鈿、上為天人、下為世人、重相見時、好合如舊」となっていて、全体に思いを丁寧に述べて長いのに加え、「伝」にはない「苟心如金堅如鈿」の語がある。これは「歌」の111.112句「但教心似金鈿堅、天上人間會相見」を言い換えたものである。これだけで、玉妃の天子への愛の切実さが強く伝わり、玉妃はずいぶん愛らしい。

方士はこれを受け取って去ろうとするのだが、何か不満げである。そこで、その理由を問う。方士が答える、他人には決してわからない証拠はないものかと。この部分はほとんど変わりはない。これは方士の対応だから、ちがいはなくてよい。貴妃の形象に影響はしない。

[10]

[伝]玉妃茫然退立、若有所思、徐而言曰、昔天寶十載、侍輦避暑驪山宮。秋七月、牽牛織女相見之夕、秦人風俗、是夜張錦繡、陳飲食、樹瓜花。焚香于庭、號為乞巧、宮掖間尤尚之。時夜殆半、休侍衛於東西廂、獨侍上。上憑

肩而立、因仰天感牛女事、密相誓心、願世世為夫婦。言畢、執手各嗚咽、此獨君王知之耳。因自悲曰、由此一念、又不得居此、復墮下界、且結後緣。或為天、或為人、決再相見、好合如舊。因言太上皇亦不久人間、幸惟自安、無自苦耳。使者還、奏太上皇。皇心震悼、日不豫。其年夏四月、南宮晏駕。

[麗]仙子欽容低肩*、合[含]羞而言曰、昔天寶六年、侍輩[輦]避暑于驪山宮。七月、牽牛織女相見之夕。秦人風俗、是夜張錦繡繪綺、樹瓜花、陳飲食、焚香于庭、為之乞巧。三拜畢、縷針於月、紵線于裳、夜方半、歇侍衛於東西廂。獨侍於帝、憑肩而玄[立]。相與盟心、誓曰、世世為夫婦。誓畢執手、各嗚咽。此獨君王知之。方士還長安、奏于太上皇。上皇甚感自悲、殆不勝情。嚙女德無極者也、死生大別者也。故聖人節其慾、制其情、防人之亂者也。生感其志、死溺其情、又如之何。

[訓]仙子 容を^{つし}み肩を低くし、羞じを含みて言いて曰く、昔 天寶六年、^{れん}輦に侍りて驪山宮に避暑す。七月、牽牛織女 相い^{まみ}見るの夕べ、秦人の風俗、是の夜 錦^{きん}繡^{しゅう}繪^{えう}綺^きを張り、^か瓜^か花^かを樹て、飲食を^{なら}べ、香を庭に^たき、之れを乞巧と為す。三拜^{おわ}畢るや、針を月に^{いと}縷し、線を裳に^お紐る。夜^{まさ}方に半ばなるとき、侍衛を東西の廂に^{やす}竭すましめ、独り帝に侍り、肩を^よ憑せて立ち、相い^{とも}与^もに心に^{ちか}い、誓いて曰く、^よ世^よ世^よ夫婦^{たら}んと。誓い^{おわ}畢るや手を^と執りて、各おの^{おえ}嗚^つ咽す。此れ独り君王のみ之れを知ると。方士 長安に^{かえ}還りて、太上皇に奏す。上皇 甚だ感じて自ら悲しみ、^{ほとん}殆^ど情に勝えず。^あ嚙、女徳は極まり無き者なり、死生は大いなる別れなる者なり。故に聖人は其の慾を節し、其の情を制し、人の乱なる者を^ふ防^さぐなり。生きては其の志に感じ、死しては其の情に溺る、又た之れを如何せん。

[訳]仙女は襟を正し、思い当たることがあってほっとした様子で(「低肩」は不詳、仮りの訳)、恥ずかしそうに言った、「昔 天寶六年のこと、陛下のみ車に乗って驪山宮に避暑にまいりました。七月、牽牛織女がめぐりあう夕べ、長安あたりには、この夜、刺繡を施した錦の織物を張りめぐらし、瓜や花を飾りたて、飲み物や食べ物を並べ、香を庭に^た焚く風習があり、これを乞巧と申します。三拜が終わりますと、針に月の光の下で糸を通し、糸をもすそに縫い付けるのです(「紵線于裳」は不詳、仮りの訳)。あれは夜もほとんど半ばになろうという時でした。近衛兵たちを東西の脇部屋に休ませ、私一人

が陛下のお側に侍り、陛下の肩にもたれて立ち、私たちは互いに誓いあったのです、いつまでもずっと夫婦でありたいものだ。言い終わると手を取り合い、二人でむせび泣きました。このことは陛下だけがご存知です」。方士は長安に帰ってこのことを太上皇に申し上げた。上皇はひどく感ずる所があり非常に悲しみ、つらくてたえがたいようすだった。ああ、婦女子の性情は、愛し近づければ、足ることを知らない、死ぬと生きるとは実につらい別れだ。だから聖人はその欲をおさえ、その情を制御し、人としての乱れと苦悩とを事前に防ぐのである。生きては女への深い思いを抱き、死んでもその情愛に溺れて抜け出すことができない、そんなことでどうするといふのだ。

【澤崎】「欽[斂]容低[眉]」—「欽」字、傳校、明鈔本ともに「斂」に作る。「斂」は「斂」に通用する。汪本・周本・張本ともに「斂」に作るが、下定氏は「欽」のままとし、「欽」はつつしむ。「欽容」で、かしこまるの意（一〇二頁）と解する。「欽容」の例は見出しがたいが、「斂容」であれば、白居易の「琵琶引」に「沈吟放撥挿絃中、整頓衣裳起斂容」とある。「斂容」は表情をあらためる意。「低眉」の「眉」については傳校、明鈔本に「眉」に作るのに従う。汪本はすでに「眉」に改めている。周本・張本もこれにならう。「低眉」は、やはり白居易「琵琶引」に「低眉信手續續彈、說盡心中無限事」とあり、「夜聞歌者」「一問一霧襟、低眉終不說」とあるなど、白居易の詩には十一例を数える。なお、傳校の「原本」欄に記されるのは「仙子欽容低眉合羞而言曰」であるが、このうち「合羞而言曰」について「拋本」の欄に校記が記されていない。対象表に記したように、この箇所、「合」は「含」の誤りである。推測するに、傳氏は「拋本」において「含」字を確認していたにもかかわらず、「合作含」という校記を消し忘れたのではあるまいか。明鈔本は「含」である。

【澤崎】「謂之乞巧」—「謂」字、下定氏は音の近似する「為」に改めるが、「謂」で通じる。傳校に校記はなく、明鈔本も「謂」とする。

この段落で最も大きなちがひ。「伝」の「由此一念、又不得居此……」の部分が、「麗」ではこの前段に置かれていること、上に述べた。

いま一つ、「伝」では、太上皇が亡くなったことが記されているのに、「麗」

にはその記述はなく、「嬉女徳無極者也」以下の文があることである。この点については後述する。

七月七日の誓いを語り始める部分。「伝」は「玉妃茫然退立、若有所思、徐而言之曰」と、やはり冷静である。方士に、二人しか知らない証拠を出せといわれておもむろに考えて語るのが以下の誓いの場面と誓いの言葉である。これに対して、「麗」は「仙子欽容低肩、合羞而言」と、証拠の提示というよりも、二人の誓いの場面と言葉を思い出し、それに恥じらいを示している。すなわち、これまた、証拠云々を越えて、玉妃の玄宗への愛が純粹に感じられる記述になっている。

七月七日の夜半、二人が誓いの言葉を交わす場面。「伝」は天寶十載なのに、「麗」は天寶六年になっている。史実としては、玄宗が楊氏の女^{むすめ}を華清宮に召したのは、開元二十八年(740)十月であり、貴妃としたのは天寶四年(745)である。天寶六年の方が、貴妃となってまだまもないころ、天寶十年は貴妃となって数年以上経った時というちがいがあがる。推測に過ぎないが、貴妃の初々しさを強調しようとする意図を持っているのではないだろうか？「麗」が「伝」を改編したものとするならば、「天寶十載」の記述をにらみつつ、「天寶六年」とする方が、貴妃のういういしさが自ずと現れると判断しての、書きかえではないだろうか？

「伝」は「時夜殆半、休侍衛於東西廂、獨侍上。上憑肩而立」と、玄宗が貴妃の肩に身を寄せる表現になっている。これだと、玄宗の貴妃への愛がまさっていることになる。「麗」は、「独り帝に侍り、肩を憑^よせて立つ」となっている。すなわち、貴妃が天子によりそう描写になっているのであり、天子を愛する可愛い貴妃像になっている。

「伝」では、二人の誓いの詞を方士に伝えた後、「由此一念、又不得居此、復墮下界、且結後縁。或为天、或為人、決再相見、好合如舊」との玉妃のが語られるのだが、この部分、「麗」では方士と会った直後に語られている。これをどう見るかはすでに上に述べた。

「伝」には、再び玄宗への思いを甦らせてしまった以上、また下界に墮ちるしかないと言った上で、「因言太上皇亦不久人間、幸惟自安、無自苦耳」と、玄宗の命が長くないことを予言し、お体を大切にという語があるが、「麗」

にはこれがない。この一文は、人間たる玄宗がまもなく命尽きることを予言しているもので、玄宗を愛する貴妃を描出するにはふさわしいものではない。すでに上に見てきた、「麗」の目的一すなわち、愛してしまえば自らはそれをどうすることもできない愛の魔力を述べること一にかなうように、この一文は削られている（「伝」が先だとすれば）と考える。

方士が玄宗に報告する場面。「麗」は、「方士 長安に還り、太上皇に奏す。上皇甚だ感じて自ら悲しみ、殆んど情に^た勝えず」で終わっている。太上皇の死は述べられず、代わりに、「麗」が書かれた目的・主題といってよいことが、「^ああ、女徳は極まり無き者なり、死生は大いなる別れなる者なり。故に聖人は其の慾を節し、其の情を制す。人の乱を防ぐ者なり。生きては其の志に感じ、死しては其の情に溺るるは、又た之れを如何せん」と、述べられている。これは、「李夫人」に近い。「李夫人」の最後の四句はこうである。「生きて亦た惑い、死にて亦た惑う。尤物は人をして忘れざらしむ。人は木石に非ず皆な情有り、^し如かず傾城の色に遇わざるに」。「麗」の「識語」の前のこの部分もまた、「李夫人」と同じく、「尤物」の無限の魅力(=魔力)を確認するとともに、「尤物」を愛してしまった天子の悲嘆の深さを強調している。ただし、「李夫人」のように、「尤物」に遇わないことだという結論ではない。訓戒で結んではいない。訓戒であるよりも、愛してしまえば、どうすることもできない人(男)の^{さが}性への詠嘆で、「麗」は終わっている。この点は「歌」に近い。「麗」は、その主題という角度から見ると、「伝」とは正反対といえるほどに離れており、「歌」と「李夫人」の間に位置すると見るのが、最も精密な定位ではなかろうか？

[11]

[伝]元和元年冬十二月日、太原白樂天自校書郎尉于整屋、鴻與瑯邪王質夫家于是邑。暇日相攜遊仙遊寺、語及此事、相与感歎。質夫舉酒於樂天前曰、夫希代之事、非遇出世之才潤色之、則与時銷沒、不聞於世。樂天深於詩、多於情者也。試為歌之、如何？樂天因為長恨歌。意者不但感其事、亦欲懲尤物、窒亂階、垂於將來也。歌既成、使鴻傳焉。世所不聞者、予非開元遺民、不得知。世所知者、有玄宗本紀在、今但傳長恨歌云爾。

[麗]元和年冬十二月、大[太]原白居易、慰[尉]于整屋[屋]。予與瑯邪王質

夫、家仙游谷。因暇日[日]、攜手入山。質夫於道中、語及於是、白樂天大深於思者也。有出世之才、以為往事多情而感人也深。故為長恨詞、以歌之。使鴻傳焉。世所隱者、鴻非史官不知、所知者有玄宗内傳*今在。予所據王質夫說之爾。

[訓]元和年冬十二月、太原白居易、盤ちゆうちつ屋に尉たり。予と瑯るう邪王質夫とは仙游谷に家す。暇日に因り、手を携えて山に入る。質夫道中にて是れに語り及ぶ、白樂天は大いに思いに深き者なり、出しゆつせ世の才有り、以おもえらく往事は多情にして人を感ぜしむるや深しと。故に長恨詞を為つくり、以て之れを歌い、陳鴻をして伝せしむ。世に隠るる所の者、鴻は史官に非ざれば知らず、知らるる所の者は、『玄宗内伝』の今在る有り。予の拠る所は王質夫之れを説くのみ。

[訳]元和元年冬十二月、太原の白居易は、盤屋の県尉だった。私(陳鴻)と瑯邪の王質夫とは仙游谷に住んでいた。ある暇な日に、連れだって山に入っていた。その道中、質夫がこのこと(天子と貴妃との情愛)について話し、「白樂天は深くものごとを考える人間だ。世に秀でた才がある。昔のことは情が深く人を感動させるといっている」。そこで、(白樂天は)「長恨詞」を作り、これを歌にし、陳鴻に伝を書かせた。世の中に伝わっていないことについては、私陳鴻は史官ではないから知らない。世に知られていることについては、『玄宗内伝』の記述が今日ある。私はただ王質夫がいうことに基づいてこれを書いたのである。

【澤崎】 「白樂大(天)深於思者也」一下定論文は本文を「白樂天大)深於思者也」として、「白樂天は大いに思いに深き者なり」(九五頁)とよむが、底本「白樂大」が「白樂天」の誤りであるために、うっかり「大」を残したままに読まれたものであろう。また「思」は四庫全書本は「恩」に作る。筆誤であらう。

「識語」の部分にも大きな異同がある。「伝」では、三人が仙遊寺に集まって、王質夫が白居易に歌を作るように勧め、白居易が「歌」を作り、陳鴻がこれを「伝」したことになっている。しかし、「麗」では三人が集まったのではない。王質夫の提言がきっかけとなって、白居易が「歌」を作り、陳が

「長恨歌伝」を書くことになった。「長恨歌伝」の記述も、史官ではないから、当時のことを知って書いているわけではなく、世間に知られていることは、玄宗の伝記にも記されている通りであり、私はただ王質夫がいうことに基づいて書いたのだという。

王質夫の役割が大きい。「歌」と「長恨歌伝」の生まれる原因が、ほとんど、王質夫の提案によっている。

そして、記述内容もまた、世間の人知らないことでもないし、世間に知られていることでもない。ただ、王質夫がいうことに基づいて書いたのだといっている。これは、「麗」が史実に即して書いたのではないという姿勢をここに表明したものである。

いま一つ、「麗」の主題に関わって重要なこと。「尤物を懲らす」ということがここには書かれていない。「麗」の主題は、たしかに「尤物を懲らす」ことにはなかった。「麗」が「伝」をにらみつつ、改変したものとするれば、「麗」の作者は、ここでも、「尤物」のたぐいまれな魅力(=魔力)が天子をも虜にしてしまう、男女の情愛の力への感嘆を述べたのだと、自らのねらい(主題)を表白していることになるだろう。

おわりに

「麗」と「伝」を比較すると、「麗」は、ことがらの外面的な展開においては、「伝」とさほど異ならない。しかし、どの段落においても、貴妃に対して「伝」のように冷たい態度ではなく、その魅力を引き出す工夫をしている。

「麗」は各所で「歌」の語を摂取し、「歌」のそれに近い貴妃象を提出している。また、さらに、「麗」はどうやら「李夫人」をも重要な素材として、作成されていると思われる。

これらのことから、「麗」は、その主題と表現においては、「伝」からはかなり遠く、「歌」と「李夫人」の間に位置する作だといっている。

「歌」が愛の無限の力への感嘆を表明するのに比べれば、「麗」は「尤物」(絶世の美女)の魅力(=魔力)を描き、美女を好きになったら自らを制御することができない愛の深い力への感嘆を述べている。「李夫人」が美女の虜とな

らないようにとの訓戒を目的としたのであるのに比べれば、「麗」は、「李夫人」よりも「尤物」の魅力を存分に表現し、如何ともしがたくその虜となってしまう天子を描いて、訓戒に力を注いでいない。「麗」は、「歌」と「李夫人」の間に位置し、「歌」により近い作と見ていい。

「麗」と「伝」の先後関係については、すでに卑見を述べた。私は、「伝」が陳鴻本来の作であり、「麗」は、後の人が、「伝」「歌」「李夫人」を素材としてアレンジした、新たな創作だと見る。

付け加えれば、私は何よりも単純な理由で、「伝」こそは、陳鴻の本来の作あるいはそれに近いものだと考える。なぜなら、金沢本の「長恨歌伝」、すなわち、「伝」は、今日伝わる最も古い、白居易自身によって認められ、白氏生前から世に伝わる「長恨歌伝」であり、文字の異同や内容上の比較を経ずとも、『文集』所収の「伝」こそは、本来のもの(今、「伝」諸種の間文字の異同は問題にしない)だと認めるのがあたりまえの見方ではないだろうか。

無論、『文集』の編成の前の事情として、「麗」が陳鴻の原作であり、白居易はそれを「伝」に改変して、『白氏長慶集』(長慶四年[824]に成る)以下の『文集』に収載したと考えることも、可能性としてあり得ないことではない。だが、ならば、「麗」の文章が何らかの形で、『文集』の「伝」とは別に伝わっていたものが、「麗情集」に収載され、それが『文苑英華』に附載され……という経緯をたどったことになる。錢鍾書が指摘するように、「麗」が北宋初期に読まれていたことを示す資料はあるが(9)、わずか一例に過ぎない。元和年間から唐末にかけて、「麗」が読まれたとおぼしき資料は他にない。「麗」は北宋初期に誰かによって作られたと考えるのが自然ではないだろうか。

また、誤字の多さや脱字のあること、難読箇所が幾つかあることなどを考えると、「麗情集」「京本大曲」に収載されるまで人の目に触れることが稀であった可能性が高い(通行し多くの人を読むテキストの文字は、わかりやすいように改められていくのが常だから)。「麗」の誤字・脱字や難読箇所の存在は、元和初年からほぼ200年間、ほとんど人の目に触れずに来たためと見るよりは、それが北宋初期に成ったものであり、未だ多くの人を読むだけの時間を経過していなかったための現象だと見るのが自然ではなかろうか。

「麗」は、『文集』の「伝」を下敷きにしておびただしい改変を加えるとともに、「歌」の表現を大量に摂取し、「李夫人」をも参考にして、北宋初期に制作されたものである。その主題は、「歌」に極めて近く、天子が「尤物」を愛してしまった時の、愛のいかんともしがたい深い力(魅力にして魔力)への感嘆にある。

拙文の課題は以上で終えた。本文中に示した、さらに追究し解決すべきさまざまな問題については、後日の課題としたい。

注

(1) 「麗情集」は、『郡齋読書志』後志巻二に二十巻が著録され、「右皇朝張君房唐英編古今情感事」と記されている。張君房は景德(1004~1007)の進士。「麗情集」は現在散佚して伝わらないが、程毅中「《麗情集》考」(「文史」11、中華書局、1981)に、『類説』『紺珠集』『緑窓新話』『文苑英華』等の諸書から四十条近くの逸文が集められている。作品はおおむね女性に関する故事を綴ったもの。「京本大曲」は、撰者不詳。李劍国『唐五代志怪伝奇叙録』(南開大学出版社、1993.12)は、「疑うらくは散韻相いまじわり、散は則ち「麗情集」所載の伝文を取り、韻は則ち白居易が歌或いは自製の曲詞を取る……」(328頁)と述べるが、「京本大曲」の実際がどうだったかは不明。書名から見ておそらく「詞曲」の類だったろう(以上、「澤崎」を節略した)。なお『文苑英華』が本文として挙げる「長恨歌伝」は、『文集』所載の「長恨歌伝」とほぼ同じである。その文字は金沢本及び刊本系『文集』所載の「長恨歌伝」の文字とほぼ一致するが、一致しない文字も少なくない。これは別個の書誌学上の問題であり、拙文ではそのちがいを考慮する必要はない。

(2) 『太平広記』以前に「長恨歌伝」という固有名詞としての題名は見えない。『太平広記』の「長恨伝」の名称について、太田次男『旧鈔本を中心とする白氏文集諸本の研究』(勉誠出版、1997.2)第三章二節(1)「「長恨歌」「長恨歌伝」の本文」は、後に伝奇が盛行して、陳鴻の伝が一層愛好されるようになり、その際に、「鶯鶯歌」に対する「鶯鶯伝」のように、「長恨伝」と名づけられたのだろうとする(中巻350頁)。

(3) 魯迅は「伝」が本来であり「麗」は、後人が増損したものとする(『中

国小説史略』第八篇「唐之伝奇文(上)」、『唐宋伝奇集』「稗辺小綴」)。

「麗」が陳鴻の原作だろうとの説を早く述べたのは、陳寅恪『元白詩箋証稿』である。次のようにいう。「又た兩本の伝文を取りて之れを読むに、即ち通行本の文は麗情本よりも較^や佳^よきを覚ゆ。頗る疑う麗情本は陳氏の原文に為^して、通行本は樂天の刪易する所を経たるかと」(1950年初出。「上海古籍出版社」[1978.3]44頁に依る)。兩伝を論じた従来の中日兩國の説については、『周』第二章第一節「《長恨伝》版本考訂(上)」が整理しているのでそれに拠られたい。中国における最近の著で比較作業をしているものとして、他に、張中宇『白居易《長恨歌》研究』(中華書局、2005.9)第五章第四節「長恨歌伝」不同版本所反映的封建文人的理解与評価」(197頁～199頁)がある。張氏は、「麗」(張は「麗情集」本とする)が陳鴻原作で、「伝」(張は「通行本(或『文苑英華』本)」という)は後に意を持って「増易」したものとし、その理由を以下のように述べる。「伝」が字数は約1700字で、「麗」よりも約200字多く、内容も完備している。表現を見るに、「麗」の方が文学的興趣に富み思いをそのままに述べていて本来に近い。「伝」は簡明で平易暢達であり、多くの推敲が成されたものにちがいない。その推敲は、「歌」の影響を受けている。例えば識語の「意者不但感其事,亦欲懲尤物,……」は、勅命を受けて『文苑英華』を編んだ李昉等が、「歌」の創作目的は「懲戒」に在ることを強調するために記したものだ。ただし、張中宇は、「麗」も「伝」も、「歌」が鑑誡を目的として作ったものだという意を伝える点で、「伝」が「麗」よりも「鮮明有力」だとしており(199頁)、兩者の本質的な違いを捉えていない。質量両面で、この比較は不十分と見る。

(4) 「伝」「歌」の原文は、太田上掲書の金沢本の文字(「基本異同表」359-370頁、「翻字」411-420頁、「註」426-430頁)に拠る。ただし、ここに一々は記さないが、太田が言及しない箇所があるため、なお確定しがたい文字が時としてある。それについては、豊原奉重の「校注」および刊本系の文字を参考にし、私の意によって定めた。

(5) 『杜詩詳注』卷二十五「唐故德儀贈淑妃皇甫氏神道碑」の黄鶴考訂にこの碑は天宝四年に建てられたものとする。『周』はこれを是として、文中「制曰、故德儀皇甫氏……宜登四妃之列、式旌六行之美、可册贈淑妃」(『杜

詩詳注』[中華書局、1979.10]第5冊 2224頁)とあるのと合わせて、天寶四載の前に玄宗は四妃の制を復活させたとする。

(6) 「后夫人」は皇后。『礼記』「曾子問」に「曾子問いて曰く、諸侯相見見るに、揖讓して門に入るも、礼を終うるを得ずして^や廢むること幾ばくぞと。孔子曰く、六なりと。之れを請い問う。曰く、天子崩ずると、大廟に火あると、日食と、后夫人の喪と、雨ふり服を霑して容を失うとは則ち廢むと」とあるのは、そのわかりやすく確かな例。ただしここは、皇后の意ではありえない。玄宗の皇后、貞順皇后武氏即ち即ち武惠妃も、元獻皇后楊氏も開成年間に薨じている(それぞれの語注を見よ)。この「后夫人」は、「伝」にいう「三夫人」等を指すと考える。

(7) 「澤崎」は、「金鈿翠羽」を、「金釵鈿合」と取り、「後に仙界において太真が方士にこれを誓いの品として渡すという設定が出来なくなってしまうのではないか。物語は矛盾をきたすかのようだ」と問題を設定し、次のようにいう。清・洪昇「長生殿」では、貴妃が亡くなる時に、金釵鈿合を共に埋葬するように高力士に頼んでおり、金釵鈿合は、貴妃とともに仙界に行き、これが仙界にやってきた方士に手渡されることになっている。「麗」は、玄宗自らが金釵鈿合を拾い、貴妃の亡骸とともに埋葬し、これが貴妃と共に仙界に持っていかれたという展開にしているのだろう。だが、私は、「金鈿翠羽」を「金釵鈿合」と同一物だと考える必要はないと思う。「金鈿」「金釵」は黄金のかんざしだが、「翠羽」と「鈿合」は別物である。

(8) 遠藤寛一「長恨歌」の研究(二)一楊貴妃に喩えられた“花”を巡って一(「駒木原国文」七、一九九六・三)は、「歌」が貴妃を、牡丹には喩えず、芙蓉に喩えている理由について、次のようにいう。「牡丹芳」・「買花」などの詩から伺われるように、妖艶にして濃麗、時に軽薄さを伴う芳しからざる女性が、牡丹のような女性像である。これに対して、芙蓉は秋が深まりもの寂しさを感じる中で、柔らかに咲く艶やかな花である。霜にも耐え抜くその姿はひたむきな、それでいて精神的に強い女性そのものである。だから、居易が「歌」で描いた楊貴妃像は、妖艶好色、野心を抱いた女性ではなく、玄宗に尽くすひたむきな女性であった。

(9) 『周』は、錢鍾書『管錐編』第二冊「太平広記 二一〇 卷四八六」

に、『青瑣高議』前集卷六秦醇「趙飛燕別伝」に「昭儀坐其中、若三尺寒泉浸明玉」の語があり、これは「麗」の「清瀾三尺、中洗明玉」を意識したものだという(第二冊 835 頁)のを承けて、次のようにいう。『青瑣高議』の編集者は劉斧。劉斧は、北宋の仁宗・哲宗の時の人だから、秦醇の在世はこれよりも早い。秦醇と『麗情集』の編者張君房との生きていた時期が近いが、秦醇がさらに早い可能性がある。錢鍾書・周相録の指摘は、北宋初期に「麗」(「麗情集」の「長恨歌伝」もしくは単行して後「麗情集」に録される「長恨歌伝」)が読まれていたことの一証になる。

語注 (段落ごとにまとめる)

[1]*六符炳靈—「六符」は三台六星の符^{しるし}驗をいう。『漢書』卷六五「東方朔伝」に「願わくは泰階六符を^の陳べ、以て天変を觀、省せざる可からず」とあり、顔師古注に「孟康曰く、泰階は三台なり、每台に二星、凡て六星。符は、六星の符驗なり」という。「炳靈」は、あきらかな威靈。また、威靈を明らかにすること。左思「蜀都賦」(『文選』卷六)に「近きは則ち江漢の炳靈、世よ其の英を戴く」とある。*盱食—時刻はずれにおそく食事をとる意(『左伝』昭公二十年に「楚君大夫は其れ盱食か」とある)で、天子が政務に没頭すること。*右丞相—「丞相」は行政の中央最高官庁である尚書省の次官(従二品)。玄宗の開元元年(713)に僕射を丞相と改称した(『旧唐書』卷四二「職官志一」)。唐代は長官である令を置かなかつたから、左右丞相が事実上の宰相となる。*端拱—端然と手を拱く。人君が無為にして天下を治める義。*儲思—ひたすらに思うの意。揚雄「劇秦美新」(『文選』卷四八)に「豈に知らんや新室は心を委し意を積み、思いを儲えて務めを垂れ、旁ら穆穆を作して、明旦に寐ねず、勤勤懇懇なる者は、秦の為に非ざるを」とある。*元獻皇后—姓は楊、弘農華陰の人。肅宗の生母。開元十七年(729)に没した(『旧唐書』卷五二「后妃伝下」)。*武惠妃—貞順皇后武氏。『旧唐書』卷五一「后妃上」に「玄宗貞順皇后武氏……上即位するや漸く恩寵を承く。……特に賜り号して[・]惠妃と為す。宮中礼秩、一に皇后と同じ」とあり、『新唐書』卷七六「后妃上」にも、「玄宗貞順皇后武氏……時に王皇后[・]廢せらる。故に[・]惠妃に進冊す、其の礼秩は皇后に比す」とある。開元二十七年(739)に

薨じた。*忽忽焉—「忽忽」は失意のさま。司馬遷「報任少卿書」（『文選』卷四一）に「居れば則ち忽忽として亡^{うし}なう所有るが若し」とある。

[2]*命婦—天子から封号を授かった婦人をいう。宮中で天子に仕える妃・嬪らを内命婦といい、宮廷外でその夫や子に由来する封号を授かった者を外命婦という。*熠燿—光り輝くさま。

[3]*織穠有度—織細さと豊満さがちょうど中庸を得ている。似た表現として曹植「洛神賦」（『文選』卷一九）に「^織ようせん^織は^{ちゆう}を^得、^修ゆう^短は^度に^合す（太り具合も中くらいで、丈の高さもちょうどよい）」がある。*后夫人—注(6)を見よ。

[4]*泥金五嶽—五嶽（東の華山・南の衡山・西の崑崙山・北の恒山、中央の嵩山）で封禪の儀式を行う。「泥金」は、封禪の儀式で用いる祭文に金泥で封をする。ここは、その儀式を執り行うことをいう。*婉孌便佞—「婉孌」は、としわかか美しいさま。『詩経』齊風「甫田」に「^{えん}たり^孌たり、^総角^{かん}たり（うつくしいかわいらしい、あげまきがあどけない）」とあり、その古注である「毛伝」に「婉孌は^わかくして^{うる}わし^き貌」とある。「便佞」は、言葉たくみに人の機嫌を取り、へつらうこと。*上宮—上陽宮。

[5]*通侯—秦漢時代の爵位の名。二十級ある爵位の最高位（『漢書』卷一九上「百官公卿表上」）。*大長公主—天子の父方のおば。女性の爵位としては最高級（『通典』卷三一「職官十三」）。

[6]*羯胡—北方の異民族を指す。安祿山を明示することを避けて、この語を用いた。*鼈纓盤水—「鼈纓」は、からうしの毛で作った冠のひも。「盤水」は「盤水加劍」。罪に服するものが水を盛った盤に劍をのせる。盤水は法の公平にかたどり、劍は自勁を意味する。例えば『漢書』卷四八「賈誼伝」に引く上疏文に「其の大譴大何（訶）の域に在る者は、譴何と聞けば則ち白冠鼈纓し、盤水に劍を加えて、請室に造りて^{つみ}を請う」とある。*蕙心紈質—美人の身心のうるわしい形容。「蕙」はかおりぐさ、「紈」はしろぎぬ。王勃「七夕賦」（『王子安集』卷一）に「金声玉韻、蕙心蘭質」とあり、鮑照「蕪城賦」（『文選』卷十一）に「東都妙姬、南国麗人。蕙心紈質、玉貌絳脣」とある。*叔向母云……—『春秋左氏伝』昭公二十八年に「（叔向の母）吾れ之れを聞く、甚だ美なるは必ず甚だ悪なること有り。……天は美を^こ是れに^{あつ}鍾

む。将^{まさ}に必ず是れを以て大いに敗るること有らん」とある。*李延年歌曰……—『漢書』卷九十七上に「延年 上に侍り^た起ちて舞い歌いて曰く、北方に佳人有り、絶世にして独り立つ。一顧すれば人城を傾け、再顧すれば人の国を傾く。寧^なんぞ知らざらん傾城と傾国と、佳人 再びは得難し」とある。

[7]*狩—巡狩に同じ。天子が諸侯の治める国を視察すること。ここは天子の逃避行を婉曲に表現している。*粵—発語の辞と取る。*曰—発語の助字と取る。*修養南宮—「修養」は父母の側に仕えて孝養を尽くすこと。ここは、肅宗が父玄宗を南宮(南内ともいう)で静養させたことを指す。「南宮」は長安の興慶宮。*宸衷—天子のみ心。*淥池—「淥」は清いの意。

[8]*上清—道教で神仙の住む天上世界。玉清・太清・上清の三階級がある。*大羅天—想像上の天界の一。単に天上の意にも用い、また仙界の意にも用いる。*地府—冥土。*瑯輿—瑯は玉の一種。玉の輿。*雲蓋—五色の雲を蓋としたもの。

[9]*洞天—神仙のいる所。十六洞天、三十六小洞天の類。*露綃帔—「綃」はうすぎぬ。「露」はうるおいの意か。「帔」はうちかけ、そでなしの衣。露したたるよううるおいのあるうすぎぬのうちかけ。*姑射山—仙人の住むという山。『莊子』逍遙遊に「藐^{はる}かなる姑射^{こや}の山に神人の^す居める有り」とある。*新垣平之詐—「新垣平」は、前漢文帝期の方士。空の雲気を見て人事の吉凶を占う術によって重用されたが、それを詐欺だと上告する者が現れ、誅せられた(『史記』卷二十八「封禪書」、『漢書』卷二十五上「郊祀志上」)。

[10]*欽容低肩—「欽」はつつしむ。「欽容」で、かしこまるの意。「低肩」は不詳。

[11]*玄宗内傳—逸文。『周』は、李商隱「碧城三首」其三の結句「武皇内傳分明在、莫道人間總不知」の「武皇内傳」がそれだとの説を紹介する(同書38頁脚注)。だが、商隱詩の諸注が指摘するように、「武皇内傳」は、班固撰(恐らく魏晋の人の偽託)として伝わる漢武帝を主人公とする『漢武内伝』だろう。

追記：

拙文は、「日本現存『白氏文集』那波本諸本の調査収集と諸本の比較研究」(基盤研究(C)、平成20年度～平成22年度科学研究費補助金)の成果の一部である。